

自然を師に、
正統を極める。

和
染
奥田元宋画伯書

Produce by Hiroyuki Hashimoto

自然に学び伝承する心。

染と織一千年の手技。

それは、惜しみなく心と手をかけた美の結晶。

先人達の守ってきたものを絶やすことなく継承し、

また、未来へと残す「松濤」。

正統はここに極み、

またここからはじまる。



ガラス工芸と織の協心

ガラス工芸作家 石田征希氏 特別対談

ガラス工芸作家
石田 征希 氏

一九四三年、大阪に生まれる。一九八五年、石田亘と結婚後、ガラス工芸パード・ド・ヴェールの研究を始める。後、一乗寺にガラス工房設立。一九九三年、日本伝統工芸展初入選。一九九四年、「石田亘・征希・バート・ド・ヴェール展」を初個展後、京都・大阪・横浜・高島屋・銀座・和光ホールなどで例年個展を開催。二〇〇〇年、日本伝統工芸近畿展京都社賞受賞。二〇〇六年、京都工芸美術作家協会展(京都の工芸今)出品(京都・高島屋・クランドホール)。石田亘・征希・知史・作品展(京都・常寂光寺)。二〇〇七年、日本伝統工芸近畿展日本工芸会賞受賞。二〇〇八年、大阪府立弥生文化博物館・秋季特別展。二〇〇九年、伝統工芸諸工芸部会展・日本工芸会賞受賞。二〇一一年、日本伝統工芸近畿展鑑査委員。現在、公益社団法人日本工芸会正会員。

橋本 博之 氏

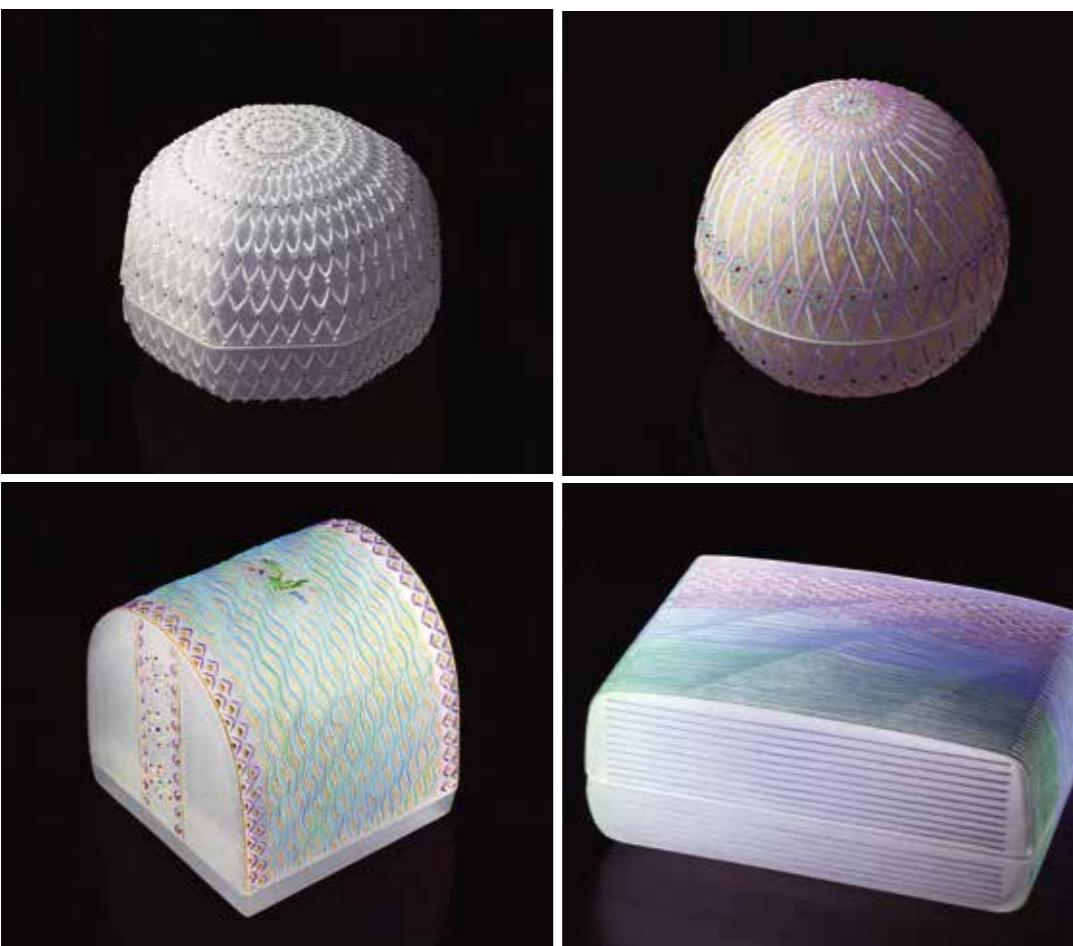
株式会社橋本テル織物／株式会社紫峯
代表取締役社長

昭和三十年四月(株)橋本テル織物創業者・前社長、橋本昭雄氏の長男として京都市に生まれる。西陣の産地問屋修業の後、(株)橋本テル織物入社。取締役を経て、平成十年一月、同社社長に就任。(株)紫峯の社長を兼任。西陣織メイカーとして帯地製造を手掛けるとともに、独自の美意識を追求したものの作りに挑戦し続け、主にアジア、ヨーロッパの刺繍に着眼し、時代にあつた織物や刺繍などの製作に積極的に取り組む。



株式会社 紫峯

〒602-8202 京都市上京区大宮通一条上ル西入
電話 075-432-5884



左上／合子『銀の露』亘作 右上／合子『春来たる』征希作 左下／簪『せせらぎ』征希作 右下／簪『湖上夕照』知史作

透明で柔らかな光をまとった、京都ならではの和のデザイン。

橋本 パート・ド・ヴェールという言葉も少し耳慣れない言葉ですが。

石田 パート・ド・ヴェールとは、元はフランス語で「ガラスの練り粉」という意味です。

橋本 日本にも古くからその技法はありましたのでしょうか？

石田 もちろん日本にも伝わっています。古代には勾玉がそうでした。平安時代、春日大社の宝物「金地螺鈿毛抜形太刀」にも、螺鈿の中にパート・ド・ヴェールの技法で作られたと思われるガラスがあります。二〇一七年、人間国宝の北村昭斎先生と一緒に、知史が復元模造事業に携わりました。

それと、二〇〇九年でしたか、亘が京都府指定無形文化財保持者に認定されたときに、日本語で「鋳込み硝子」という名前を作つていただきました。

橋本 そうだったのですか。技術が発達した現在においても難しいこの技法は、取り組む方が少ないと聞いています。希少な技法ですね。



橋本 先生の作品との出会いはもうかれこれ三十年前くらいになるでしょう。初めて出会ったとき、そのピュアで温かな表情に一目惚れしました。

石田 ありがとうございます。

橋本 先生のガラス技法はパート・ド・ヴェールですね。創作を始められたきっかけは何だったのでしょうか？

石田 もともと主人の石田亘が、アール・ヌーボー全盛期のアマリック・ワルター

パート・ド・ヴェール、現代に生きるガラス工芸の表現。

のガラス工芸作品を見て、自分の創作の工房を始めたのがきっかけでした。私も強く惹かれて、それから一人で長く研究を重ねてきました。

橋本 そうでしたか。私もワルター・ガレなどが好きでコレクションしています。特にパート・ド・ヴェールの技法で作られたガラス工芸は、ガラスという硬質な素材でしながら、手に優しく馴染む感触がいいですね。

石田 心に染み込むような柔らかな光が、内側から放たれているような感じが素敵でしょ。それがパート・ド・ヴェールという技法の持つ魅力ではないでしょうか。



橋本 ところであらためてお聞きしたいのですが、パート・ド・ヴェールとはどういったものなのでしょう？

石田 古代ヨーロッパからある技法です。有名なのはやはり、アール・ヌーボー時代に活躍したアルジイ・ルソーや、ワルターなどの作家たちの作品ですね。作り方は型の中にガラスの粒を糊で練つて入れ、型ごと焼成し、また型を壊してガラスを取り出すという、手間のか

かるとても非効率的な技法です。けつこう力のいる仕事で、毎日毎日、格闘している（笑）。

橋本 格闘ですか？（笑）。確かに大きな作品になると型は重くて、しかもガラス 자체はデリケートで繊細な素材ですから、想像するより大変な作業でしょうね。

石田 ええ、ほぼ力仕事です（笑）。



型から割って取り出し、加工をする



彫ったところに色ガラスを入れる工程

橋本 技法もさることながら、私が感動するのは、先生の作品にある、和の美意識です。それはやはり、日本人ならではの感性でしょ。そしてこの京都という地で創作されているからでしょうね。

石田 はい。京都ならではの伝統を感じていただければ嬉しいです。年月を重ねて来たからこそ持つ、柔らかさや、温かさ、気品、そういう目には見えない、大切な空氣感のようなものを作品に表現したいと思います。

橋本 それが、和のイメージと重なって表現されるのかもしれませんね。

日本には正倉院文様や有職文様など、完成度の高い、しかもそこに意味を持つ文様が伝えられていますからね。

橋本 ええ、きっと橋本さんの着物や帯よりも同じだと思いますよ。

日本には正倉院文様や有職文様など、完

成度の高い、しかもそこに意味を持つ文

様が伝えられていますからね。

橋本 ええ、きっと橋本さんの着物や帯も、私が先生の作品をイメージして創

作したものですね。

石田 素敵ですね。夏にぴったりですね。都会的でモダンなイメージの中に、流れの曲線がふわりとした風のようで、帯の色もなんともいえない優しい色です。

橋本 褒めていただきて光榮です。伝統を大切にしながらも、現代に合うもの創りを目指しています。

橋本 ところでお主人の亘さん、ご子息の知史さんと、ご一家がアーティストというには珍しいですね。

石田 試行錯誤しながら親子三人による作品展を開催してきました。

橋本 ご主人の亘先生は白を基調にした格調あふれる文様の世界、征希先生は女性らしい繊細で可憐な色彩やフォルム、知史先生はエッジの効いたグラデーションと躍動感あふれる造形。違いがはつきりとわかります。

石田 同じパート・ド・ヴェールという技法を使いながらも、それぞれの表現が違うのが面白いですよ。

橋本 伝統はどこか奥底の方で繋がっていて、けれどもの作りのスピリットは、やはり時代に合わせてどんどん変化していくものだと思います。

石田 そうかもしれません。アートや芸は時代と共に感されてこそ、残るものだと思います。

橋本 パート・ド・ヴェールというガラス工芸も私たちの作る織物も、時代に合う形を変えながら、時代を超えて、受け継がれていくものかもしれません。



石田知史氏と一緒に

変わりゆくものと、変わらないもの。 時代を超えて継承される美しさ。



制作の話が尽きない石田氏と橋本氏



松涛居

株式会社 橋本テル織物／株式会社 紫峯
京都市北区大宮駅前10-31 TEL.075-493-0001



橋本 そうです。同じ絹糸でも、刺繡糸で精巧な線を丁寧に表現することでパート・ド・ヴェールのガラスの美しさを織でイメージすることができます。先生の文様のラインの立体感も同時に表せました。そして色を重ねていくことで、織物なのに、どこか透明感のある都会的な作品に仕上がったと思います。



石田 それと、表現において色も大変重要な要素だと思います。

橋本 私は上品な砂糖菓子のような可憐さや色合いなどが好きです。

橋本 作品によっては、粉ガラスの色を数種類使うことでも、ほかのガラスには無い複雑なグラデーションや情感ある水彩画のような色彩を創り出すことが出来ます。

橋本 ガラスにこんなに豊かで自由な色彩があるなんて本当に驚きました。

石田 特に和のデザインをするときに一色一色が大切です。

橋本 本当に流麗な色彩表現ですから

ね。先生の作品のイメージを織で表現する場合、そこがいちばん苦心しました。

石田 ガラスと織物という全く違う素材でるものね。

橋本 シャープな線と色のグラデーションが織の組織では思つたようにうまく表現できないのです。そこで、試行錯誤ののち、刺繡を加えて表現することにしました。

石田 刺繡ですか？